

『趣味の遺伝』

— 夏目漱石が描いた旅順攻囲戦 —

橋 川 俊 樹

(1) 冒頭をめぐる

『趣味の遺伝』は「帝国文学」の明治39年1月号に発表され、同年5月刊行の『漾虚集』に収められた。『倫敦塔』や『幻影の盾』など幻想的な短編の多いこの本の中では日常的な作品だが、冒頭が主人公の「空想」から始まる趣向は『倫敦塔』に通じている。

陽気のせいでも神も^{きちがい}気違になる。「人を^{ほふ}屠りて餓えたる犬を救え」と雲の^{うち}裡より叫ぶ声^{きか}が、^{うご}逆しまに日本海を撼かして満洲の果まで響き渡った時、日人と露人ははっと応えて百里に余る一大屠場を朔北の野に開いた。すると渺々たる平原の尽くる下より、眼にあまる^{ごうく}獒^{なまくさ}の群が、腥^きき風を横に^き截り縦に裂いて、四つ足の銃丸を一度に打ち出したように飛んで来た。

「狂える神」は犬たちに「^{すす}血を啜れ」、「^{くら}肉を食え」、「肉の後には骨をしゃぶれ」と命じ、「狂う神の作った犬」は「^と牙を鳴らして骨にかかる」。

ある者は^{くじ}摧いて髓を吸い、ある者は^{まみ}砕いて地に塗る。歯の立たぬ者は横にこいて^と牙を磨ぐ。

怖い事だと例の通り空想に耽りながらいつしか新橋へ来た。見ると停車場前の広場はいっぱいの人で凱旋門を通して二間ばかりの路を開いたまま、左右には割り込む事も出来ないほど行列している。何だろう？

この冒頭部は引用されることが多く、論者によっては漱石の日露戦争批判として持ち出される場合もある⁽¹⁾。確かにここでは、「狂える神」が「餓えたる犬」を救うために「人を屠」る、それが戦争だ、という獯猛な戦争イメージが提示されている。もしこれが戦争中の発表であれば物議を醸した可能性もあっただろう。しかし『趣味の遺伝』は、明治38年9月5日のポーツマス条約締結から三か月後に執筆された。つまり、漱石は終わったばかりの〈戦

争〉の惨さ・残忍さを回顧的・寓意的に示したのだ。

この冒頭の空想は、「怖い事だ」という語り手＝主人公の「余」の述懐を引き出すためのものであり、さらには知人と待ち合わせる新橋駅で目にした凱旋部隊歓迎の光景、昨年末に旅順攻囲戦で死んだ友人へと繋いでいく伏線でもある。

ただし、漱石が〈戦場〉を「一大屠場」と呼び、「犬（狗）」という〈獣〉の争いに喩えたことは、明治37年9月号の『明星』に発表された有名な与謝野晶子の新体詩『君死にたまふこと勿れ』の戦争表現を想起させる。

| | |
|--------------|-------------|
| 君死にたまふこと勿れ | すめらみことは戦ひに |
| おおみづからは出でまさね | かたみに人の血を流し |
| 獣の道に死ねよとは | 死ぬるを人のほまれとは |
| 大みこころの深ければ | もとよりいかで思されむ |

〈戦争〉を「獣の道」と認識するこの詩は、岩崎紀美子『與謝野晶子とトルストイ』によれば⁽²⁾、同年8月2日から20日まで東京朝日新聞に断続掲載された『トルストイ伯の日露戦争論』（杉村楚人冠・訳）に影響されて書かれたという。

その楚人冠訳の第一章には、「戦争が最劣等なる獣欲を催進し人類を墮落し獣化せしむるものなることは人の普く知れる所」とある。

冒頭の苛烈な寓意表現から見ると、『趣味の遺伝』執筆当時の漱石も〈戦争〉は人間を「獣化」させるものだ、という感覚を抱いていた可能性はある。しかし、それで日露戦争批判をしているわけではあるまい。開戦当初、同じ『帝国文学』（明治37年5月号）に新体詩『従軍行』を発表して勇壮な征露意識を表現した当時とは違い、終わってみれば日露戦争は凄惨とも悲惨とも言い得ないくらい苛烈なものだったという認識が、『趣味の遺伝』の冒頭に表れてしまったということであろう。

また与謝野晶子の場合も、戦争批判というよりはむしろ、丁年以上の男子を個人や家の事情に斟酌なく、命を危険にさらす戦場に送りこむ徴兵制度への批判というべきだろう。十年前の日清戦争と違い、西洋の大国ロシア相手の戦争には多数の兵の犠牲が予想された。従って、ひとたび出征すれば命はないものとする決死の覚悟がどの将兵にも必須とされていたのである。

『君死にたまふこと勿れ』には、「（旅順口の包囲軍の中に在る弟を嘆きて）」という副題がある。しかし晶子の弟の所属する大阪の第四師団歩兵第八連隊は第二軍（司令官・奥保鞏）に属し、明治37年8月末の時点では遼陽会戦（24日～）の真最中であつた。旅順攻囲戦を受け持っていたのは第三軍（司令官・乃木希典）所属の第一師団（東京）・第九師団（金沢）・第十一師団（善通寺）である（のちに北海道の第七師団が加わる）。

実は、8月中旬の時点では、旅順攻略は極めて楽観視されていた。第三軍は7月末には旅

順要塞への包圍網を整え、8月7日に大孤山・小孤山を奪取して旅順市内に迫っていた。それゆえこの頃は早期の旅順開城が国内では噂され、8月24日の東京朝日新聞の一面には「旅順最後期」として、「最近着のジャンク曰く日本軍は一昨日椅子山を占領せり白玉山の露軍の火薬庫は火事を起こしたり」（記事全文）と出ていて、26日の株式欄には、「旅順陥落前の株式」と題して、「旅順陥落を目捷の間に控へ居りながら依然氣迷ひを脱し兼ね」と始まる記事まで登場している。

ところが事実は8月19日からの第一回総攻撃が失敗に終わり、第三軍は1万5千人に及ぶ未曾有の戦死者・負傷者を出していた。日本軍はロシア軍の各要塞が備える鉄条網・地雷・塹壕それにベトン（コンクリート）で固められたトーチカ（防衛陣地）に跳ね返され、各砲台からの砲撃と機関砲（機関銃）の銃撃によって甚大な損害を受けた。

しかし8月20日以降の東京朝日新聞にはどこにもこの総攻撃についての記事がない。「公報」がないのはもちろん、第三軍付きの従軍記者にも箝口令が布かれていた（東京朝日の第三軍第九師団付き記者は半井桃水⁽³⁾だった）。29日に、24日の支那人からの情報として「日本軍は椅子山を攻撃して露兵を撃退せしも之に砲を据ゑ付くことを得ず椅子山の^{かげ}蔭敵の砲火より蔽はれたる小山に砲を据ゑ居れり」とあるのが珍しく具体的な記事である。

つまり与謝野晶子は旅順第一回総攻撃の悲惨な結末を何も知らずにあの詩を書いていたのである。一方、9月に入ってから激戦だった遼陽会戦の戦況は好転し、3日の号外には「遼陽全勝」の大きな見出しが躍り、7日には『遼陽全勝詳報』が掲載される。しかし、旅順攻圍軍の情報は全く現れない。

そして9月も23日になってから『旅順現況何如』という記事が出て、旅順陥落の遅れと遼陽の戦果への不満が語られている。

旅順口は果して膿し乎、潰れし乎、或は切開せられし乎。吾人は未だ之を知らず、知る所は其陥落の少しく遅延し居ること是なり。遼陽大捷後、其捷捷の十二分ならざりしとて、我同盟国民に多少の遺憾を醸さしめたるも、畢竟は旅順陥落の少しく遅延し居る矢先に於て、一方に遼陽集中の敵の主力が我網を漏れたるに因るものなり。

もちろん東京朝日新聞の記事はマスコミの反応の一部であり⁽⁴⁾、当時の戦況を伝えるメディアとしては博文館発行の『日露戦争実記』（従軍記者に田山花袋）・『日露戦争写真画報』、『征露戦報』（実業之日本社）、国木田独歩の『戦時画報』（近事画報社）、『軍国画報』（富山房）など月3回発行の専門雑誌があった。しかし8月末から10月末まで、旅順要塞第一回総攻撃に関してはどの新聞・雑誌も似たようなもので、雑報的な記事か外国人からの憶測記事のみである（遼陽会戦については写真・地図付きの特集が大々的に組まれている）。

周知の通りこの第一回総攻撃の凄惨な戦いを描いた小説が桜井忠温の『肉弾』⁽⁵⁾である（刊行日は明治39年4月25日で、『趣味の遺伝』よりも三か月余り後）。桜井は、堅牢な要

塞に対する「強襲法」による正面攻撃が特に歩兵の甚大な損耗を招くことを示しているが、その悲惨な実態は戦争当時ほとんどが隠蔽されていた。

37年7月末から旅順陥落を楽観視していた世間は、陥落の報知どころか戦闘そのものの情報がないままに放置され、10月末ようやく具体的な情報に接することができた。10月30日になって旅順方面の戦闘に関する報道管制が解け、大本営も11月1日に8月以降の『戦報』を公表したのだ。大本営『戦報』の8月21日の項には次の記述がある。

中央隊は未明盤龍山東砲台に向ひ突撃を実行せるも猛烈なる敵の機関砲の射撃と鉄条網の破壊未だ充分ならざりしとに依り之を攻略するに至らず 左翼線は鉄条網を破壊し未明に乘じ東鶏冠山北砲台に向ひ弾雨を冒して猛進し午前八時頃同砲台東南約二百米突^{メートル}にある中間堡壘を奪取せるも此隣堡壘よりする側背射の爲め損害甚だしく午前九時頃止むを得ず之を棄つるに至れり

具体的な記述は多くないが、第一回総攻撃の挫折を認めてはいる。けれども同時に掲載されはじめた戦死者への叙勲の記事は『某方面戦死者叙勲』とされ、旅順攻囲軍の惨状を姑息に隠蔽しようとする意図が見える。

こうした軍や政府の報道制限・検閲については、11月23日の『旅順敵壘の構造』と題する記事の中で「攻囲軍附特派員」大森友之丞が次のように述べている。

読者諸君、吾人が我忠烈なる軍隊就中諸君が最も知らんと欲し聞かんと望む所の当攻囲軍の戦況を通信すべく従軍してより已に百日〈略〉其間に於ける通信の事項を数ふれば悉く是れ諸君の希望に適はずして幾んど半文銭の価値なく〈略〉今や漸くにして十月二十九日以前の戦記を公表するの自由を得たりと雖も尚甚だ多くの制裁ありて

「謹厳なる検閲を経て幾多の抹殺を加へられ」る、という報道の現状が訴えられている。10月29日以前とされたのは、30日が第二回総攻撃の突撃開始日だったからであろう。

11月5日に「乃木軍付特派員」半井桃水が『攻囲陣中日録』の中で8月19日の第九師団の戦闘状況を報告している。

聞く今朝未明より攻撃開始せられたりと、早速山上に登れば敵の陣地は眼前にありて砲弾の発着一々明かに見るを得、〈略〉此時工兵は敵の堡壘（盤龍山北方高地）間近に進みて鉄条網を切断し歩兵は溝伝ひに進み時機を待つて突貫せんとす、砲戦の機は熟したり、午後六時歩兵は猛烈の勢を以て敵壘に突進せしが敵兵激しく射撃し地物の抛るべきなきが故全く敵を遂ふ能はず斯る程に東鶏冠山、盤龍山、二龍山、松樹山各方面の砲火は我兵に向て集中せんとす

このあと桃水は、朝日新聞に親しみをもつ「蘆澤工兵中佐」の訪問を受けたが、21日の項に「此日より夜に掛けて某々諸部隊は交々突撃して非常の苦戦をなし蘆原中佐の如きも此日戦死せられたりと聞く」とある。11月8日には「攻囲軍戦死者 蘆澤工兵大佐」という記事が出て、「去八月二十二日旅順背面第一回総攻撃に当りて中央砲台に向つて突進中敵丸に中りて壮烈なる戦死を遂げ工兵大佐に昇進し功四級金鷄勲章を賜はり」とある。

このように8月19日からの第一回総攻撃は、11月になってやっと真相が知られるようになった。しかし桜井の『肉弾』と比較すれば明らかなように、その地獄のような惨状はまだほとんど表れていない。このあとの第二回総攻撃（10月26日～）、そして漱石が描いた第三回総攻撃（11月26日～）についても戦闘の詳細が国民に知らされることはなく、12月初旬の二百三高地奪取のニュースが活字を躍らせるまでこの状態が続いていく。

そして「二百三高地」の凄惨な肉弾戦が、悲壮な英雄的犠牲としてマスコミや世間から讃えられるようになると、松樹山はじめそれ以外の旅順要塞攻撃の凄惨さの印象が薄れる結果となってしまう。

与謝野晶子は弟が旅順包囲軍に居ると誤認したけれども、このような当時の報道環境では無理もない。しかし弟の属した第二軍の戦歴も、遼陽会戦・沙河会戦・奉天会戦と旅順に劣らず激烈を極めており⁶⁾、彼が結果的に死傷しなかったのは偶然に過ぎない。けれど、もし本当に旅順攻囲戦に参加していたならば、死傷率は飛躍的に高まったことだろう。

「獣の道に死」ぬ運命に弟を委ねたくない、家の大事な弟に戦場で死んでもらいたくない、なぜ殺し合いに私の弟が駆り出されなければならないのか、理不尽な徴兵制に対する素朴で切実な批判意識が『君死にたまふこと勿れ』には明らかに流れている。

これに対して漱石の『趣味の遺伝』の焦点は〈戦争〉そのものにはない。この小説は、冒頭で〈戦争〉の陰惨なイメージを呈示し、次に満州の戦野から帰還した将軍・兵士たちに視点が移り、さらに11月26日の旅順要塞第三回総攻撃に参加した歩兵中尉の友人の回顧になっていく。しかし、これらはすべて〈趣味の遺伝〉の前フリとすることもできる。

明治38年12月11日（月）の漱石書簡から、この作品は同日に書かれたことが分かっている。帝国大学と高等学校、明治大学の三校で教えていた多忙な漱石は、その日の学校を休んでこれを書き上げた。「是は六十四枚ばかり。実はもつとかゝんといけないが時が出ないからあとを省略しました。夫で頭のかつた変物が出来ました。」（高浜虚子宛書簡）とある。

また12月3日の虚子宛書簡には「今日から帝文をかきかけた」とあるので、凱旋した将軍・兵士については、おそらくは3日までの遅くとも10日までに凱旋した部隊がモデルになっているだろう。そして主人公の目は、凱旋した「将軍」の姿と、「婆さん」に出迎えられたひとりの「軍曹」に向けられる。

この小説の主意は、その「婆さん」と「軍曹」に触発されて友人の墓参りをしたことで湧き起こる〈趣味の遺伝〉問題にあったはずである。本郷郵便局で一日会っただけの男女がなぜお互いに惹かれ合ったのか、その理由には彼らの祖先の報われなかった〈恋愛〉＝〈趣味〉

の遺伝があったという内容がメインであったはずが、男の側の戦争・凱旋・突撃などの描写が長くなり、竜頭蛇尾の「頭のかつた変物」になったのだと思われる。

しかしそのおかげで、漱石の作品には珍しい戦場や軍人の描写をわれわれは読むことができる。特に新橋駅の凱旋シーンや旅順要塞への突撃シーンは日本の近代文学全体から見ても希少価値がある。その文学的価値は別問題として、ここには当時の〈戦争〉や〈軍人〉に対するイメージが典型的かつリアルに表現されているからだ。

(2) 凱旋に湧く新橋駅

ポーツマス条約締結により日露戦争の勝利が確定したのが明治38年9月5日、すぐに条約内容に不満な国民の一部が東京で焼き打ち事件を起こしたが、それも落ち着くと、まず東郷大将らバルチック艦隊を破った海軍部隊が帰国してきて、華々しい凱旋行事が東京はじめ全国各地で催された⁽⁷⁾。

陸軍の凱旋は11月初旬からで、兵站部や野戦病院など後方部隊を中心に大連から帰国の途に就き、門司や宇品に帰港、鉄道でそれぞれの本部基地に凱旋した。『趣味の遺伝』に描かれたような実戦部隊の凱旋は、11月中旬からの近衛師団所属の旅団・連隊・大隊からである⁽⁸⁾。近衛師団は東京・関東出身の兵士が多く、大部分は大隊単位で品川の軍用駅に到着したが、師団・旅団司令部と同じ列車の場合は新橋駅に到着した。

行列の中には怪し気な絹シルクハット帽を阿弥陀に被って、耳の御蔭で目隠しの難を喰い止めているものもある。仙台平を窮屈そうに穿いて七子の紋付を人の着物のようにじろじろ眺めているものもある。フロック・コートは承知したがズックの白い運動靴をはいて同じく白の手袋をちょっと見たまえと云わぬばかりに振り廻しているのは奇観だ。そうして二十人に一本ずつくらいの割合で手頃な旗を押し立てている。〈略〉一番近いのを注意して読むと木村六之助君の凱旋を祝す連雀町有志者とあった。ははあ歓迎だと始めて気がついて見ると、先刻の異装紳士も何となく立派に見えるような気がする。のみならず戦争を狂神のせいのように考えたり、軍人を犬に食われに戦地へ行くように想像したのが急に気の毒になって来た。

11月27日の東京朝日の記事『凱旋歓迎の盛』に、「凱旋軍隊の到着地点に於ては勿論、凱旋列車の通過途中に於ても、その歓迎の盛んなる、人をして一種の快感に打たれしむ」とある。東京の各新聞は凱旋部隊の到着駅・到着時間などの案内を掲載し、東京朝日の場合『凱旋予報』『凱旋部隊入京』欄を設けていた。さらに野戦部隊が到着するようになると、凱旋部隊の戦歴や司令官の経歴などが詳しく紹介されている。

近衛師団、そして主人公の友人「浩さん」が属する第一師団のある東京は、主要な駅前・

大通り・広場・公園などに立派な凱旋門が競い合うように建てられていた。また、満州軍総司令部・各軍司令部の凱旋時には盛大な凱旋式が挙行され、その凱旋パレードの行程や式次第が新聞に掲載された。師団長・旅団長クラス以上は歓迎の凱旋式がある新橋駅に必ず到着し、駅からは馬車によるパレードが恒例としてあった。

『趣味の遺伝』の「余」は、一人の凱旋した将軍が近くを通り過ぎのを見て、駅前で馬車に乗る所も見たいと思い、思い切って前の人の頭越しにジャンプをする。

余の左右に並んだ同勢は一度に万歳！ と叫んだ。その声の切れるか切れぬうちに一人の将軍が挙手の礼を施しながら余の前を通り過ぎた。色の焦けた、胡麻塩髯（ごましほ）の小作りな人である。左右の人は将軍の後を見送りながらまた万歳を唱える。〈中略〉 将軍は生れ落ちてから色の黒い男かも知れぬ。しかし遼東の風に吹かれ、奉天の雨に打たれ、沙河の日に射り付けられれば大抵なものは黒くなる。地体黒いものはなお黒くなる。髯もその通りである。出征してから白銀（しろがね）の筋は幾本も殖えたであろう。

〈中略〉 ここだと思いついて、両足が胴のなかに飛び込みはしまいかと疑うほど脚力をふるって跳ね上った。

幌を開いたランドウが横向に凱旋門を通り抜けようとする中に——いた——いた。例の黒い顔が湧き返る声に囲まれて過去の記念のごとく華やかなる群衆の中に点じ出されていた。将軍を迎えた儀仗兵の馬が万歳の声に驚ろいて前足を高くあげて人込の中にそれようとするのが見えた。

昔の注釈の一部にこの色黒の将軍を乃木大将とするものがあるが、漱石が『趣味の遺伝』を書き上げた明治38年12月11日の時点では、乃木大将も第三軍も帰国していない。それは翌年1月半ばのことである。12月10日以前に凱旋した野戦部隊は第一軍の近衛師団のみであり、この「将軍」のモデルは、近衛師団の師団長あるいは所属の旅団長か、または9日に着京した第一軍司令官・黒木為楨大将ということになる⁹⁾。

主人公の「余」は新橋駅の一等待合室で、「暖炉の横に赤い帽子を被った士官が何かしきりに話しながら折々佩剣をがちゃつかせている」のを見ているが、この「赤い帽子」は近衛師団のトレードマークである。

12月4日の『近衛師団長凱旋』という記事には、「昨年征露の軍起りて真先に出征したるは第十二師団と近衛師団とす爾来十有八箇月の久しき間幾十回の悪戦猛闘を為し常に赫々の遺勲大功を奏し、鴨緑江ではロシアの「大軍と激戦健闘し爾来日本の紅帽軍として露軍を震撼せしめた」、とある。

鴨緑江、遼陽、沙河、奉天のいずれの戦闘においても激戦を繰り返してきた野戦部隊は、一年半にわたる満州平野の戦場暮らしのために兵も将も、肌の色を黒くし、胡麻塩の髯はいっそう白くして凱旋した。

「余」は偶然、凱旋した將軍の黒い顔と白い髻を見て、得難い感銘を受ける。

平生戦争の事は新聞で読まなくてもない、またその状況は詩的に想像せんでもない。しかし想像はどこまでも想像で新聞は横から見ても縦から見ても紙片に過ぎぬ。だからいくら戦争が続いても戦争らしい感じがしない。その気楽な人間がふと停車場に紛れ込んで第一に眼に映じたのが日に焦けた顔と霜に染った髻である。戦争はまのあたりに見えぬけれど戦争の結果——たしかに結果の一片、しかも活動する結果の一片が眸底を掠めて去った時は、この一片に誘われて満洲の大野を蔽う大戦争の光景がありありと脳裏に描出せられた。

この「將軍」が誰なのかを特定する場合、凱旋列車の到着時間が有力な鍵になるだろう。主人公は或る男が「もう直です二時四十五分ですから」と言うのを聞き、「時計を見ると二時三十分だ、もう十五分すれば凱旋の将士が見られる」と思う。

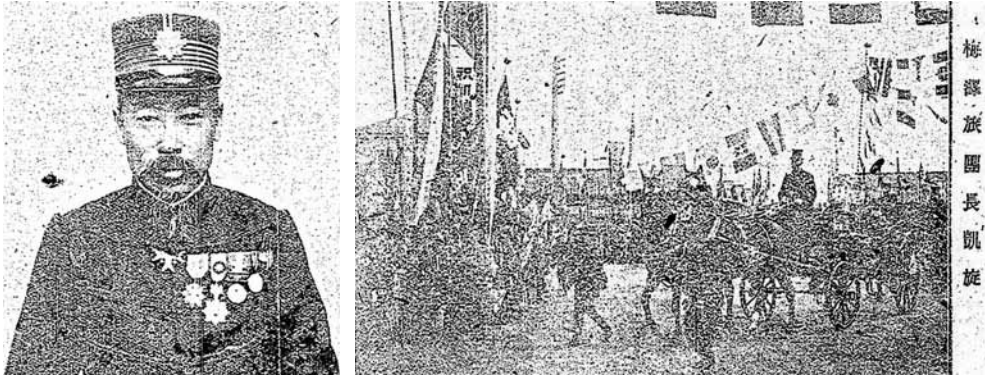
12月11日以前に新橋駅に着いた軍・師団・旅団の各司令部の到着時間は次の通りである。

- ・11月23日 午後2時56分 近衛師団・後備混成旅団（旅団長・梅澤道治少将）
- ・11月26日 午前7時41分 近衛師団・後備歩兵第一旅団（旅団長・隠岐重節少将）
- ・12月3日 午後1時15分 近衛師団司令部（師団長・浅田信興中将）
- ・12月4日 午後1時11分 近衛師団・歩兵第一旅団（旅団長・木村有恒少将）
- ・12月5日 午後1時11分 近衛師団・歩兵第二旅団（旅団長・谷山隆英少将）
- ・12月7日 午前10時39分 満州軍総司令部（総司令官・大山巖元帥）
- ・12月9日 午前10時39分 第一軍司令部（司令官・黒木為禎大将）

以上で分かる通り、午後2時台に新橋駅に到着したのは、11月23日の近衛師団後備混成旅団司令部のみであり、午後到着は12月3日～5日の師団司令部と二つの旅団である。満州軍総司令部と第一軍司令部は午前10時39分着であり、〈時間〉的にはモデルにはならない。ちなみにこの到着時間は、奥大将の第二軍司令部（39年1月12日）と乃木大将の第三軍司令部（1月14日）の場合も同じである。

つまり、この「將軍」は梅澤旅団長の可能性が高い（次頁写真：左が肖像、右が凱旋馬車）。

また、梅澤少将の近衛後備混成旅団司令部が凱旋した11月23日は、新嘗祭の祭日で学校は休みである。一方、浅田中将の近衛師団司令部が凱旋した12月3日は日曜日であった。仮に新橋駅の凱旋部隊歓迎のシーンが漱石の体験に基づくとしたなら、この二人のどちらかがモデルであろう。もちろん知人や学生からの伝聞を元にした可能性も高いので、確定はできない。ただし、文中に「この凱旋の將軍、英名嚇々たる偉人」とあるのは、勇名を馳せた黒木大将のイメージに近いようにも思える。



しかし、黒木大将に劣らず、その第一軍所属、近衛師団後備混成旅団長の梅澤道治少将も「英名」を謳われた將軍である。11月23日の東京朝日がその戦歴を詳述しているが、この日の新聞を漱石が読んで、「英名嚇々たる偉人」と称した可能性はある。

沙河会戦當時に至りても亦我満州軍の最右翼部隊として本溪湖を死守す、^{おも}顕ふに沙河の会戦は黒鳩公將軍が遼陽を恢復し更に旅順を援護せん為め予め宣言して必勝を期したるもの先づ我最右翼を突破するの戦略を画し其部下随一の驍勇と称せらるゝスタケルンベルグ將軍の引率する軍団をして之に向はしめたり、梅澤軍寡兵を以て能く此大軍に当り後方勤務に服せし補助輪卒をして分捕銃^{ぶんどり}を執りて防守に任せしむる迄の苦策を施し遂に我に十倍する敵兵を撃破したるなり 〈中略〉

出征後備兵団の頗る夥しき中に梅澤旅団の名のみ特に其名を知られ戦地に於ても〈略〉単に梅花を画けば郵便物さへ到達する程に至りては決して其近衛たるが故に非ざるなり驍勇の名、殊功の声共に高き梅澤少将の凱旋に際し満都の士民が熱誠を捧げて歓迎の意を表し其功勞を^{ねぎら}犒^{いひ}ふは理の当然と謂つべし

この過大な称賛は、梅澤混成旅団が野戦軍として初めての、しかも目立った武勲を挙げた凱旋部隊だからだろう。ちなみに漱石は、『吾輩は猫である』第五章(38年7月)で、「混成猫旅団を組織して露西亜兵を引っ搔いてやりたい」と猫に言わせている。

新橋駅に降り立った梅澤將軍(当時53歳)の様子を25日の記事は次のように伝えた。

小春日和の好晴に新嘗祭を伴ひ^{ステーション}停車場の中央には万国旗を張り左側には名誉職員席を設け右側及前面には各区団体旗を翻へして整列し師団より差遣はしたる儀仗兵一個中隊は左側に整列したり、構内亦出迎者を以て充満しプラットホームの先頭にせる軍楽隊の凱旋の譜を奏し始むるや凱旋列車は徐々として第二番線に停車し少将は第一に寺内陸相より凱旋の祝詞を受け次に伊瀬地留守師団長其他より順次祝詞を受けたる後大本営より

差廻されたる馬車に参謀長及副官と同乗次位の馬車に幕僚五名同乗万歳^{せいり}声裡近衛騎兵半小隊の儀仗に前後を警衛せられて大本営に入り一時休憩の後参内せり少将は陸軍少将の略装に金鷄勲章を佩用し聊か疲労の模様もなく群衆万歳を連呼するや一々挙手して至極元氣に見受けられたり

前述のように、東京に本拠を置く軍司令部や師団・旅団司令部の凱旋時には馬車仕立ての凱旋パレードがその都度催され、軍司令官・師団長・旅団長らは大本営あるいは師団本部に入り、それから宮城（皇居）に参内するのが慣例であった。

在京師団の凱旋部隊は、ほとんどが大隊・中隊単位で品川駅に到着した。梅澤旅団の場合も同様である（11月23日の記事）。

梅澤旅団に属する近衛後備歩兵第一聯隊本部及同聯隊第一大隊第一中隊と同第二大隊の一個中隊は〈略〉昨日午後零時五十五分山陽鉄道の客車にて品川停車場に安着したり停車場には近衛将校十数名出迎ひて神谷大佐に祝辞を述べ一般の歓迎員は広場に団体旗を建て例の如くに迎へたり殊に此聯隊には東京出身の勇士多ければ一家族を挙げての歓迎もありて万歳の声盛んに唱へられ一層の賑ひを呈したり扱て安着の軍隊は一声の喇叭に降車し広場に整列し点検を受けて暫時休憩の上光輝ある聯隊旗を先頭に隊列を整ふて高輪通を営所に凱旋したり

新橋駅に到着した大隊・中隊も同じような歓迎を受けたことだろう。さらに11月29日には、この部隊の「解隊」の記事が出ており、「去二十三日梅澤旅団の凱旋と共に帰京せし近衛後備歩兵第一聯隊の全部は直に牛込区内の宿舎に入りて在泊中の処一昨日午前九時を以て竹橋内後備聯隊本部に於て武器納めの式を行ひ夫より俸給酒肴料及び路費等の給与あり愈昨日午前十一時半を以て解隊せられ」た、とある。

以上のように、梅澤旅団（近衛師団後備混成旅団）を例に、凱旋とその歓迎、解隊までの流れを東京朝日の記事から追ってみた。また、12月1日の『凱旋のさまざま』という記事には「凱旋軍隊の日毎に着京し引続いて除隊となる兵士も多」い、とあり、常備軍の場合は時を置かずに除隊となるケースも多かったようだ。

浅田近衛師団長と黒木第一軍司令官の司令部の場合、それぞれ近衛師団歩兵第一旅団と第四旅団の所属部隊とともに凱旋しているので、部隊は新橋駅でそのまま解散している可能性が高く、『趣味の遺伝』の「出迎え」のシーンには適っている。

將軍の去ったあとは群衆も自から乱れて今までのように静肅ではない。列を作った同勢の一角が崩れると、堅い黒山が一度に動き出して濃い所がだんだん薄くなる。気早な連中はもう引き揚げると見える。ところへ將軍と共に汽車を下りた兵士が三々五々隊を

組んで場内から出てくる。服地の色は褪めて、ゲートルの代りには黄な羅紗を畳んでぐるぐると脛へ巻きつけている。いずれもあらん限りの髻を生やして、出来るだけ色を黒くしている。これらも戦争の片破れである。大和魂を鑄固めた製作品である。〈中略〉

兵士の一隊が出てくるたびに公衆は万歳を唱えてやる。彼らのあるものは例の黒い顔に笑みを湛えて嬉し気に通り過ぎる。あるものは傍目もふらずのそのそと行く。歓迎とはいかなる者ぞと不審気に見える顔もたまには見える。またある者は自己の歓迎旗の下に立って揚々と後れて出る同輩を眺めている。あるいは石段を下るや否や迎^{むかえ}のものに擁せられて、あまりの^{ふいうち}不意撃に挨拶さえも忘れて誰彼の容赦なく握手の礼を施こしている。出征中に満洲で覚えたのであろう。

その中に——これがはからずもこの話をかく動機になったのであるが——年の頃二十八九の軍曹が一人いた。

「将軍」のモデルが、梅澤混成旅団長（少将）であるか、浅田近衛師団長（中将）であるか、それとも黒木第一軍司令官（大将）であるか決めがたいが、この「軍曹」が近衛師団の所属であることは疑いない。

主人公はこの軍曹を「亡友浩さんと兄弟と見違えるまでよく似ている」、「しかし浩さんは下士官ではない。志願兵から出身した歩兵中尉」だ、などと考えながら見ていると、「どこをどう潜り抜けたものやら、六十ばかりの婆さんが飛んで出て、いきなり軍曹の袖にぶら下がった」。二人の歓喜に満ちた出迎えシーンに感動した「余」は、去年の11月26日、旅順攻囲戦で戦死した友人の墓を久しぶりに参ろうと決意する。

『趣味の遺伝』の「余」は当時の漱石と同じく、帝国大学で教えている「学者」であるらしい。仮に「余」も友人の「浩さん」も「軍曹」と同じ数えの二八か二九歳だとすると、ふたりは同じく学士であったが友人は卒業後「志願」して陸軍士官になった、という設定だと考えられる。二六歳で大学を卒業したと仮定すると、軍人になって二年目か三年目ということになる。

もしそうであるなら、当時の軍人に帝大卒業生は珍しく、「学士」の戦死者は次のように雑誌で取り上げられている（『日露戦争実記』明治37年12月、第47編）。

二学士の戦死

他日大いに国家に貢献すべき有為の才を空しく砲弾の煙に失ひたるは最も痛悼すべし。十月十日、海鼠山麓の戦に於て、文学士新島源助氏を失ひ、十一月廿八日二百三高地の激戦に農学士足立美堅氏を失ひたり。

新島文学士は去る三十五年帝国大学文科を卒業し、同年十二月志願兵として某歩兵營に入營し、累進して大尉に至れり。〈中略〉

足立農学士は諸陵頭足立正聲氏の長子にして、三十五年七月帝国大学農科大学を卒業

し、同年十二月一年志願兵となりて近衛歩兵第一聯隊に入営し、以て今回の戦に従へり。〈略〉十一月二十六日二百三高地の攻撃開始せらるゝや、少尉は其中隊を卒いて奮進し、二十八日午前六時よりは突撃隊に加はりて奮戦し、同山の第一塹壕を越え、鉄条網を越えて敵堡壘二十米突に近き時、敵弾飛来して、右肩胛、頸部、右腹部、及び頭頂後部に重傷を負ひ、遂に名誉なる戦死を遂げたり。

記事は、「此等有為なる学士を失ふ、国家に取りて実に二重なる損失と謂うべし」と結んでいる。単に命が奪われただけでなく、彼らの持つ有為の学問・知識も失われた、というのだ。与謝野晶子が家の大事な跡取りとしての弟の命を惜しんだのとはまた別な意味で、「学士」の戦死は惜しまれた。

さらに「浩さん」の場合、母一人子一人であった。「婆さん」の母親をぶら下げながら去っていく「軍曹」を見て、「余」の心に一年前の旅順攻囲戦で死んだ友人の姿が蘇える。

(3) 旅順攻囲戦 — 忘れられた「松樹山」突撃 —

浩さん！ 浩さんは去年の十一月旅順で戦死した。二十六日は風の強く吹く日であったそうだ。遼東の大野を吹きめぐる、黒い日を海に吹き落そうとする野分の中に、松樹山の突撃は予定のごとく行われた。時は午後一時である。掩護のために味方の打ち出した大砲が敵壘の左突角に中って五丈ほどの砂煙を巻き上げたのを相図に、散兵壕から飛び出した兵士の数は幾百か知らぬ。蟻の穴を蹴返したごとくに散り散りに乱れて前面の傾斜を攀じ登る。見渡す山腹は敵の敷いた鉄条網で足を容る余地もない。

ところを梯子を担い土嚢を背負って区々に通り抜ける。工兵の切り開いた二間に足らぬ路は、先を争う者のために奪われて、後より詰めかくる人の勢に波を打つ。こちらから眺めるとただ一筋の黒い河が山を裂いて流れるように見える。その黒い中に敵の弾丸は容赦なく落ちかかって、すべてが消え失せたと思うくらい濃い煙が立ち揚る。

『趣味の遺伝』第二章の冒頭は、明治37年11月26日の旅順第三回総攻撃の場面から始まる。これも「余」の「想像」シーンであるが作品冒頭とは異なり、友人「浩さん」の突撃シーンを「余」が俯瞰的な視点から見守っているような設定である。

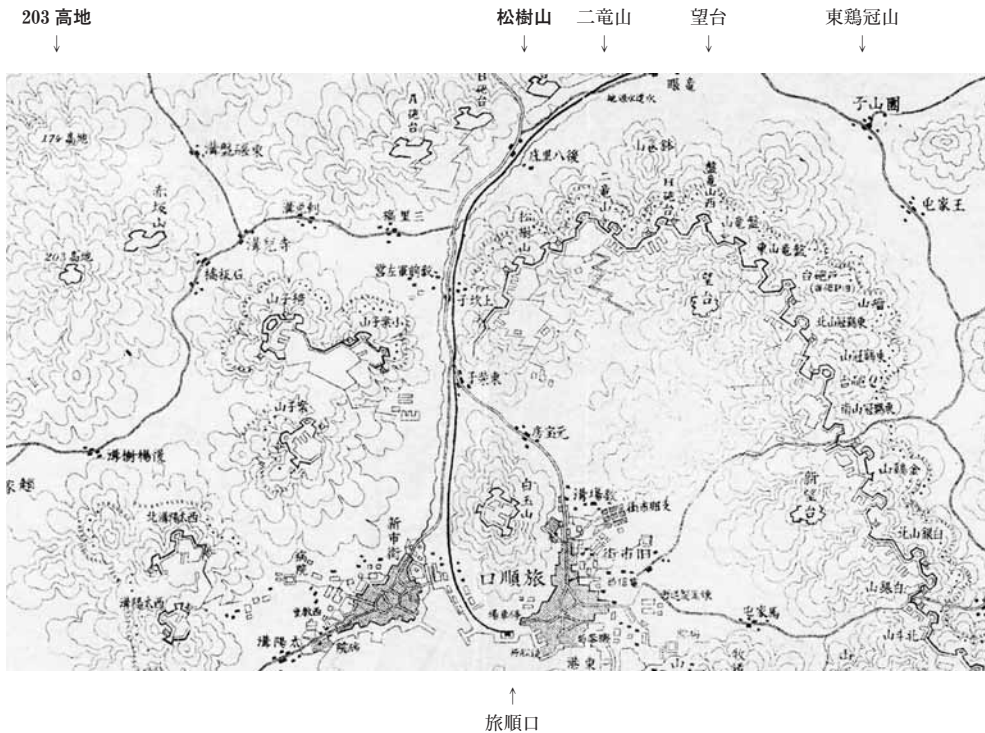
「松樹山」攻撃の担当は、東京の第一師団である。突撃隊の主体はもちろん歩兵であり、「浩さん」の階級「歩兵中尉」は、中隊長に任せられることも多い。突撃の現場指揮官であり、連隊旗の旗手を務める者もこの階級に多い。

攻撃対象の「松樹山」は、8月の第一回総攻撃の時から常に第一師団が受け持ち、多大な犠牲を払いながら満足な成果を残せていない難攻不落の要塞である。第一師団はまた、第三軍の最右翼として二百三高地攻撃も受け持ち、作戦変更後の11月28日以降は、新たに加わっ

た第七師団(旭川)とともに激闘を演じることになる。

次の地図は、博文館が少年向けに発行した雑誌『少年日露戦史』(第11編、明治38年5月)掲載のものである。旅順口は、松樹山から東鶏冠山まで背後が200~300メートルクラスの低い山に囲まれており、ロシア軍はその主要な山頂すべてに砲台や堡壘を築いていた。また、北西のかなり離れた位置に「203高地」があり、ここは9月下旬の攻撃時にはまだ手薄であったが、その後防備が増強され堅固な要塞となっていた。

中央隊は北陸の第九師団で、二龍山^{にりゅうざん}を正面攻撃し、左翼に陣取る四国の第十一師団は、東鶏冠山^{ひがしけいがんざん}方面を担当した。地図で見ると、第一師団担当の「松樹山」は敵の本拠地・旅順旧市街への最短距離の途中に立ちはだかっている。旅順街道がすぐ脇を通っており、ロシア軍が最も重点的に防御する要塞である。



11月26日の総攻撃は、午後一時に予定通り開始された。この日までに工兵と歩兵は、「正攻法」の原則に従って塹壕や通路をジグザグに出来得る限り敵陣近くまで掘り進めていた⁽¹⁰⁾。突撃隊は狭い通路を、味方の砲撃の援護を受けながら、敵の砲弾・銃弾の雨を潜り抜けて突き進む。突撃地点までたどり着くと一散に斜面を駆け上がり、鉄条網を越えて敵の塹壕まで突進し、そこで加えられる銃撃と爆裂弾・地雷の脅威に耐えて、敵の堡壘や砲台を目指すのである。

現在の旅順周辺の山々は緑の木々に覆われているが、旅順背面の山々は松樹山も二龍山も

みな〈裸の山〉である。真昼の攻撃の場合、頂上に居る敵からの見通しは非常にいい。夜には巨大な探照灯（サーチライト）が突撃する日本兵を照らし出す。さらに近隣の砲台からは盛んな砲撃が繰り返される。

『趣味の遺伝』は「一筋の黒い河」と表現しているが、次の「望台」突撃の写真⁽¹⁾に見えるように黒いジグザグの河である。砲撃の白煙が立ちのぼる中、個人の識別など不可能な一連の黒い「筋」となって兵士たちは登っていく（画面の中央、左寄り）。



漱石は、「正攻法」による〈松樹山突撃〉を克明に描いている。旅順要塞総攻撃に参加した一人の歩兵中尉がどのように死んでいったのかを記憶するために。

どこへ出しても浩さんなら大丈夫、人の目に着くにきまっていると思っていた。だから蠢めいているなどと云う下等な動詞は浩さんに対して用いたくない。ないが仕方がない。現に蠢めいている。鍬の先に掘り崩された蟻群の一匹のごとく蠢めいている。杓ひしゃくの水を喰くらった蜘蛛の子のごとく蠢めいている。いかなる人間もこうなると駄目だ。大いなる山、大いなる空、千里を駆け抜ける野分、八方を包む煙り、鑄鉄の咽喉のんどから吼えて飛ぶ丸たま——これらの前にはいかなる偉人も偉人として認められぬ。俵に詰めた大豆の一粒のごとく無意味に見える。嗚呼浩さん！ 一体どこで何をしているのだ？ 早く平生の浩さんになって一番露助ろすけを驚かしたらよかろう。

黒くむらがる者は丸を浴びるたびにぱっと消える。消えたかと思うと吹き散る煙の中に動いている。消えたり動いたりしているうちに、蛇の塀をわたるように頭から尾まで波を打ってしかも全体が全体としてだんだん上へ上へと登って行く、もう敵壘だ。浩さん真先に乗り込まなければいけない。煙の絶間から見ると黒い頭の上に旗らしいものが靡いている。〈略〉浩さんだ、浩さんだ。

「余」のナレーションはまるで実況中継のようだ⁽¹²⁾。彼はこの「旗」の持ち主を無理やり「浩さん」と決めてしまって、その設定で実況を続けていく。

黒い塊^{かたま}りが敵壘の下まで来たから、もう壘壁を攀じ上るだろうと思ううち、たちまち長い蛇の頭はぼつりと二三寸切れてなくなった。これは不思議だ。丸を喰って斃れたとも見えない。狙撃を避けるため地に寝たとも見えない。どうしたのだろう。すると頭の切れた蛇がまた二三寸ぶつりと消えてなくなった。これは妙だと眺めていると、順繰^{じゅんぐり}りに下から押し上^{あが}る同勢が同じ所へ来るや否やたちまちなくなる。しかも砦の壁には誰一人としてとりついたものがない。塹壕だ。敵壘と我兵の間にはこの邪魔物があって、この邪魔物を越さぬ間は一人も敵に近く事は出来ないのである。彼らはえいえいと鉄条網を切り開いた急坂を登りつめた揚句、この壕の端まで来て一も二もなくこの深い溝の中に飛び込んだのである。担っている梯子は壁に懸けるため、背負っている土嚢は壕を埋めるためと見えた。壕はどのくらい埋ったか分らないが、先の方から順々に飛び込んでなくなり、飛び込んでなくなってとうとう浩さんの番に来た。いよいよ浩さんだ。しっかりしなくてはいけない。

俯瞰的な視点から「余」の視界だけが語られているために、ここでは勇壮な呐喊の声も砲弾の炸裂する音も銃声も聞こえない。まるでサイレント映画に弁士が説明を付けていくように場面は進んでいく⁽¹³⁾。

高く差し上げた旗が横^{なび}に靡^{すたすた}いて寸断寸断に散るかと思うほど強く風を受けた後、旗竿が急に傾いて折れたなと疑う途端に浩さんの影はたちまち見えなくなった。いよいよ飛び込んだ！折から二竜山の方面より打ち出した大砲が五六発、大空に鳴る烈風^{つんぎ}を劈いて一度に山腹に中^つって山の根を吹き切るばかり轟き渡る。逆しる砂煙は淋しき初冬の日蔭を籠めつくして、見渡す限りに有り^{おわ}とある物を封じ^{おわ}了る。浩さんはどうなったか分らない。気が気でない。あの煙の吹いている底だと見当をつけて一心に見守る。

しかし、煙が晴れて眼を凝らして見ても、塹壕を上^{あが}がって来る者は誰もいない。「余」の想像は、かけがえのない友人の死にざまを精一杯ドラマチックに盛り上げようとするが、結局はうまくいかない。

五秒は十秒と変じ、十秒は二十、三十と重なっても誰一人^{いちにん}の塹壕から向うへ這^{あが}い上る者はない。ないはずである。塹壕に飛び込んだ者は向へ渡すために飛び込んだのではない。死ぬために飛び込んだのである。彼らの足が壕底に着くや否や穹窿^{きゅうこう}より覘^{ねらい}を定めて打ち出す機関砲は、杖を引いて竹垣の側面を走らず時の音がして瞬く間に彼らを射殺

した。殺されたものが這い上がれるはずがない。石を置いた沢庵のごとく積み重なって、人の眼に触れぬ坑内に横わる者に、向へ上がれと望むのは、望むものの無理である。〈中略〉これがこの塹壕に飛び込んだものの運命である。しかしまた浩さんの運命である。蠢々として御玉杓子のごとく動いていたものは突然とこの底のない坑のうちに落ちて、浮世の表面から闇の裡に消えてしまった。旗を振ろうが振るまいが、人の目につこうがつくまいがこうなって見ると変りはない。浩さんがしきりに旗を振ったところはよかったが、壕の底では、ほかの兵士と同じように冷たくなって死んでいたようだ。

漱石は機関銃の音を「杖を引いて竹垣の側面を走らす時の音」と表現した。カカカカカカという乾いた銃声が聞こえてくるようだが、実際に聞いた事はあるまい。第二軍付き軍医部長として従軍していた森鷗外（軍医監）なら聞いたことがあるだろう。「浩さん」をはじめ第一師団の突撃歩兵をなぎ倒したのは銃眼から連射されるこの機関銃の弾丸である。

8月の第一回総攻撃と違いこの日の総攻撃では、右翼・中央・左翼ともに掘削活動に工兵・歩兵をすべて投入して整えた通路・塹壕・坑道を伴う突撃陣地が形成されていた。できる限り敵塁近くまで掘り進める一方で、敵砲台の真下まで坑道を掘り進めて敵陣を爆破する作戦も各隊ともに遂行されていた。

もし十分な時間があれば、余裕をもった「攻城法」の方針をとって旅順攻囲戦を進めることが出来たかもしれない。しかし、10月についてバルチック艦隊が動いたという情報が入り、また野戦軍も遼陽会戦から沙河会戦へと激戦が続いて第三軍の早期合流が期待されていた。攻囲軍による一刻も早い旅順陥落が、陸海軍からも、天皇・政府からも、国民・世論からも求められていたのである。

しかし、前回10月26日からの第二回総攻撃（歩兵突撃は30日から）は、「正攻法」で攻めた初めての総攻撃で、二八サンチ榴弾砲の援護も加わり成果が期待されたが、敵砲台・堡塁の堅牢さにまたも跳ね返された。この時の死傷者は第一回の三分の一以下であったがそれでも四千近い死傷者が出ている。旅順攻囲戦の情報が解禁になり、次の第三回総攻撃では砲台奪取という世間にアピールできる〈勝利〉が是非とも必要であった。だれよりも第三軍の将兵が汚名返上を願っていた。特に第一師団は決死の覚悟で松樹山砲台の占拠を目指したはずである。死んでいった多くの仲間の「弔い合戦」のためでもある。

しかし、『趣味の遺伝』に描かれたように、第一師団による11月26日の松樹山攻撃はまたも失敗に終わり、全滅する部隊が続出した。その夜に決行されたのが「特別予備隊」いわゆる「白襪隊」による奇襲作戦であった。

ジグザグに通路・坑道を掘り進める「正攻法」は、時間がかかり一気に敵砲台を奪取することができない。そこで、松村第一師団長によって立案された「特別予備隊」は、第一、第九、第十一、それに着いたばかりの第七師団から選抜された、中村覺少将の直接指揮による独立混成部隊である。この独立隊は26日の日没から行動を起こし、昼に落とすことができ

なかった松樹山砲台の後ろにある「補備砲台」へ夜襲をかけた。

ここで「白禪隊」について述べておく意味は、第一師団による旅順第三回総攻撃といえば「白禪隊」しか歴史に登場してこないからである。現在行われている日露戦史の類では、総攻撃初期については「白禪隊」の逸話しか出てこない。それは当時の戦争雑誌の記事を見ても同じことで、それでも第九師団による二龍山攻撃や第十一師団による東鷄冠山攻撃は中央・左翼軍の行動として取り上げられることがあるが、「白禪隊」の派手な玉砕があるがために、右翼・第一師団が最初に行なった「松樹山」突撃についてはほとんど取り上げられていない。

先に掲げた『少年日露戦史』でも「決死の白禪隊」のみ取り上げられていて、そこには次のような隊長・中村少将の檄が載っている⁽¹⁴⁾。

『我が独立隊の目的は、敵の要塞地を中断するにあるのぢや、一人たりとも生還する心では成らん、若し吾輩が死んだら、渡邊大佐が之に代る、渡邊大佐が倒れたら、大久保中佐が代るのぢや。其他も皆この通り、順次に代る者を定めて置け！ 襲撃は銃剣突撃が主ぢや。第一着の地歩を占める迄は、たとひ敵の猛射は受けても、一発も応射する事は成らんぞ、故無く後方に止まるか、^{みだ}漫りに隊伍を離れるか、又は退却するものは、皆隊長が斬って棄てる。』

と、^{おごそ}厳かに云ひ渡しましたので、之を聞いた全隊の将士は、肉躍り骨鳴るまで、皆奮い立たずには居られませんでした。

第一師団参謀だった大尉の証言では、「白禪隊」の奇襲は次のような経過をたどって悲惨な結末を迎える⁽¹⁵⁾。

「第三回総攻撃がいよいよいかんということになりましたから、その日の暮れるのを待って松樹山堡壘のもう一つ後ろにあった補備砲台というのに向かって、中村少将が最先頭に立って旅順街道を肅々と進みました。暗夜のことですから、途中までは知られずに行きましたが、斜面中腹に達したとき、敵の地雷に引っ掛かったのです。それが敵への警報となりまして、探照灯で照らされ、同時に集中射撃を受けたのです。

どうせ決死隊ですから、それでも構わずずんずん進んで行ったが、そのうちに旅団副官が戦死をする、参謀は初めての地勢で部隊と離れてしまい、どこへ行ったか分からず、旅団長もそのうちに怪我をする。」

「夜が明けてみますと、補備砲台の下の斜面はまるで飯の上に蠅が止まったように、我が忠勇なる戦死者の死骸でもって覆われていました。」

これを、明治38年3月という早い時期に刊行された戦史『日露交戦録 旅順陥落の巻』（春陽堂）の描写によると、次のようになる。

難事中の難事冒険中の冒険誓つて死を決するの士に非ざるよりは焉んぞ能く斯の如きを得んや、部署は定まれば、右翼団選抜の隊は率先して松樹山方面の地隙に進み、月の未だ出でざるに先だち補備砲台を奪取せんとし、午後八時三十分縦隊突撃を試みたり〈中略〉

是時に当り正面の敵は射撃せざるも、松樹山新砲台よりは盛なる砲撃を試み、椅子山の探照灯は一直線に我陣地を照し、其物凄き光を我兵の頭上に浴せつゝあり、我兵尚前進して敵散兵壕の前方約二十米突の距離に達するに及び、地雷の爆発すること二箇所、尚進んで最下に達するや、敵は頻に爆薬を投じ新砲台よりは益々猛射を加ふるより、我の死傷頗る多く進むに随つて右側面よりは小銃を乱射し、後方の諸砲台よりは曳火弾を送り来ること頗る急に我の死傷益々大なり

隊長の中村少将は途中で負傷し、指揮を渡辺大佐に託して後送された。まもなく帰国し、「東京予備病院」に入院中の中村少将に取材した『征露戦報』（明治38年2月、第四号）の記事がある。少将は独立選抜隊を「抜刀隊」とか「決死隊」とか呼ばれるのを嫌がり、「私が抜刀隊を率いて往つたなど世間ではそうなつて居ますが」、「目的も達成することも出来ずに負傷したなどと国家に対しては誠に相済まず世間に対しては何とも愧入つた次第である」と語っている。

司馬遼太郎の小説『坂の上の雲』（1968～1972年発表）は、第三軍司令官・乃木希典大将と参謀長・伊地知幸介少将を旅順攻囲戦における数々の作戦失敗の元凶とし、「無能」と評した。その根拠の一つがこの「白禪隊」奇襲作戦の無謀さにある。司馬は、たった三千の兵で「旅順市街に突入せよ」と命じた司令部の荒唐無稽を強調しているが、この作戦には、先の檄に表れているような中村少将の特攻精神が災いしたように思える。それを乃木司令官が乾坤一擲の奇襲作戦として容認し、わざわざ激励の辞を贈るほどに成果を期待したことに大きな問題があった。

夜陰にまぎれてとはいえ敵正面の本街道を進むことも問題だが、なぜ松樹山補備砲台の奪取などに向つたのだろうか。たとえその砲台の防備が手薄だったとしても周辺の砲台が生きている以上、集中砲火を浴びることは必然である。しかも「正攻法」で攻めている対象ではないので勝手が分からず、とにかく闇雲に突進するだけ、という自殺行為に近い作戦である。どうせならそのまま街道を突っ切って旅順市街に斬りこんだ方がまだ意味があったように思えるが、「松樹山」にこだわった第一師団組の暴走のようにも見える。

司馬はロシア軍の要塞を、「砲台の前には地雷原があり、鉄条網があり、そのまわりには機関銃と速射砲がある。日本軍は一隊全滅すれば、いま一隊が屍をこえて突撃し、まれに砲台の胸壁によじのぼる者があっても、登ったむこうにはまた側防機関銃があり、そこを走りぬけてさらに突入したところでまた咽喉部の防御がある」と書いている。

漱石が『趣味の遺伝』で描いたのは、一人の要塞壘壁登攀者すら出せずに全滅していった

多くの突撃部隊の姿であったのだ。

この状況を打開したのは、28日以降「二百三高地」に攻撃対象を絞り、そこに参戦したばかりの第七師団を投入し、ほとんどの大砲をその援護に回してからである。単に撤退しただけに終わった過去の総攻撃とは異なり、二百三高地は奪い奪われの大激戦、総攻撃全体で再び一万五千にのぼる死傷者を出したが、12月5日、ついに二百三高地の完全占領に成功した。すぐに旅順港内の砲撃を敢行、翌日の東京朝日新聞号外には、「旅順公報 港内大砲撃」の見出しが躍った。第三軍初の「大勝利」であった。

この間にも第三軍の各師団は、松樹山・二龍山・東鷄冠山等で地道な工作作業を続行し、15日から31日にかけての突撃で次々と要塞攻略を成功させた。特に坑道を砲台直下まで掘り進め、大量の爆薬で爆破する作戦が各方面ともに功を奏した。とはいえ、最後は歩兵による肉弾戦である。これも機関銃の銃座さえ沈黙させれば、日本兵の方が強かった。

以上のような松樹山などへの、地道な坑道掘進作業を伴う「正攻法」の攻略について、『坂の上の雲』はあまりに扱いが小さい。文春文庫版第五巻の三分の一、150ページが「二百三高地」攻防戦に当てられているが、こちらは次の数行で終りである。

二〇三高地の陥落後もなお、旅順要塞の攻防はつづいている。

ただし、戦勢は逆転した。砲兵力も日本軍のほうが優勢になり、工兵の活動面でも坑道掘進による敵堡塁の爆破作業が容易になり、歩兵突撃もさほどの損害をとまうことなくして可能になった。諸事、車が坂をくだるようにして容易になった。

結局、第三回総攻撃における第一師団による「松樹山」歩兵突撃は、選抜決死隊である中村「白禪隊」の登場と、その後の第三軍初の大勝利「二百三高地」制圧によって完全に霞んでしまった。第一師団に関しては、その後も他の第九師団・第十一師団の要塞攻略より遅れをとり、松樹山の完全攻略は12月31日大晦日のことだった。

司馬遼太郎の第三軍司令部批判の要点は、なぜ8月の第一回総攻撃で一万五千もの死傷者を出す失敗を演じながら、その後も9月、10月、11月と総攻撃のたびに同じような正面突撃を命じ、歩兵の多大な損傷を出して平気だったのかということに尽きる。

ひとつだけ言えることは、命じる方ばかりではなく命じられる方も、肉弾突撃で何とかなると無邪気に信じていた、ということである。自分が捨て石となっても後に続く仲間が何とかしてくれる、今日が駄目なら明日が、今回が駄目でも次はというふうに、死ぬことが自分の役割であるかのように突撃を敢行したのだ。むろん、後に芥川龍之介が『將軍』で描いたように納得していない兵士もいたことだろう。しかし主流は、楽観的なくらいに「進んで死ぬ」ことに疑問を感じない兵士たちだった。そんな兵士たちの従順さに、司令する側が甘えていたように思える。

『趣味の遺伝』の「浩さん」も日記に、「五時大突撃。中隊全滅、不成功に終る。残念!!!」

と記していた。中隊全滅は、旅順攻囲軍の歩兵中尉にとって「残念」に感嘆符を三本付ける程度の出来事である。とにかく欲しいものは「勝利」、それだけのために〈戦争〉は遂行され、「浩さん」のような立派な男子が犠牲となって穴の底で冷たくなるのである。

攻囲軍中央隊だった金沢第九師団は、明治39年1月という早い時点で『第九師団征露紀念戦闘日記』を地元で発刊しているが、ここでも11月26日の総攻撃は実にあっさりとは描かれる。二八センチ榴弾砲が12門配備され、「その威力や実に大なるもの有りしに拘はらず第三回攻撃は終に全線非に了りぬ」、これだけである。

そのあとに、前の第二回総攻撃における第九師団の二龍山砲台攻撃の激闘が語られる。

右翼平佐旅団は外岸に二個所の垂坑路を穿ち之を爆破して突撃攻路を開き歩兵第十九聯隊第一大隊（長高木少佐）を第一突撃隊第三大隊（長小木津大尉）を第二突撃隊とし第二大隊（長藤岡少佐）をして咽喉部に迫らしむるの区分を為し〈略〉期至るや第一突撃隊は原田中隊を第一線に古田中隊を第二線粟田中隊を第三線川久保中隊を第四線とし躍進呐喊壕内に突入し諸隊之に続くや敵は地雷を發した胸臆上の土囊壁に抛り小銃機関砲を乱射し爆薬を投下して死守防戦甚だ力むれば我が損傷多大にして高木少佐数弾を受けて倒れ服部聯隊長胸部貫通銃創を受けて戦死し原田大尉古田中尉戦死し粟田大尉川久保大尉以下死傷続出して一度軽砲線を奪取したるにも拘はらず重砲線占領の機を發展するに至らず再び外岸頂に退き機を待つの外無きに至りぬ

これは11月26日、27日の総攻撃の戦果に見るべきものがないので前回の総攻撃で惜しくも占領を逃した激戦を挿入したのだろう。第九師団の突撃歩兵中隊が全滅・損傷していく姿がよく分かる。38年になってからは、戦争雑誌などでも要塞攻略の死闘が描かれるようになるが、隊名・個人名がこれだけ出てくるものは珍しい。おそらく北陸出身の戦死した軍人の遺族に向けて彼らの活躍を描く意図があったのだろう。

第九師団長の犬島久直中将は金沢凱旋時の談話で、「今回の戦勝は全く国民の力に依る自分の如きは多数の部下を殺し申訳なし寧ろ敵弾に死せざりしを憾とする位なり」と語っている（東京朝日、39年1月17日）。多数の兵を死なせたという自責の念はおそらく乃木大将にも同じようであったに違いないが、それをあまり表には見せていない。自分の命より兵の命より、何よりも天皇陛下の御為が優先される。それは当時の軍人に限らず日本国民ほとんどすべての信条だったと言えるが、宮城のお膝下にある近衛師団と第一師団の将兵にはその意識が特に強かったように思われる。

漱石は談話『戦後文界の趨勢』（『新小説』明治38年8月号）でかなりオブティミスティックな日露戦後観を語っているが、この時期は日本海海戦の大勝利のあとで、条件のいい和平条約が結べるものと国民全体が信じこんでいた頃である。そんなお祭りムードに乗ってしま

うような漱石の日露戦争観は、当時の庶民感覚に近いものがあったようだ。

戦場の勇士たちが凱旋してきた11月・12月、世間は歓迎ムードに沸き立っていた。そんな頃に夏目漱石は『趣味の遺伝』という小説を書いたのである。それは熾烈な要塞突撃シーンを含みつつ、語り口も構成も何ともユルイ小説であったが、漱石がこの作品で最も大切にされた人物といえば、たぶん旅順攻囲軍の戦死者「浩さん」の母親であつたらう。

小論で特に注目したのは、漱石が、日露戦史では忘れられている明治37年11月26日の第一師団による松樹山突撃の様子を詳述した事実である。それはもしかすると、「浩さん」にリアルなモデルがあり、その人がたまたま旅順で戦死した第一師団の歩兵中尉であつたのかもしれない。実際、茨城県真壁郡の有志が刊行した『日露戦役紀念写真帖』（明治40年2月）を見ると、紹介されている戦死者のキャプションには「松樹山」「二百三高地」の文字が散見する。漱石の周辺にも第一師団の旅順攻囲戦戦死者が居ておかしくはない。

【茨城県真壁郡出身の松樹山戦死者】



盛京省
松樹山戦死者
出征軍人
酒井鐵之助君
全村



清國松樹山
戦死者少尉
功級五勳
大田文助君
吉沼村



松樹山砲臺突撃戦死者
陸軍歩兵少佐功級五勳
勳等正四位
阿久力川寛海君

けれどもし漱石が故意に「松樹山」突撃を描こうとしたのだと仮定すると、なぜ有名な「二百三高地」の方を選ばなかったのだろうか、という疑問が湧いてくる。

この疑問も次の答えも全くの想像に過ぎないが、多大な犠牲を払ったにしろ最終的には〈勝利〉を勝ち取った「二百三高地」の戦死者は報われたと言えるけれども、三回もの総攻撃における正面突撃で一つの砲台も確保できなかった「松樹山」の戦死者は、むごい言い方をすれば「無駄死」「犬死」だったからではないだろうか。

漱石は報われることなく死んだ「浩さん」のような軍人に、せめてフィクションの中だけでも、一目会っただけで見染め合った、「余」が驚嘆するくらい「美しい」女性を婚約者にして、この世に残ってしまった老母の傍に寄り添わせてあげたかったのだろう。

(2016年11月24日稿)

《注》

- (1) 水川隆夫『夏目漱石と戦争』（2010年、平凡社新書）は、〈日露開戦の決断は「狂った神」＝「天子」＝天皇の誤りであり、日露間の問題の解決のためには、もっとねばり強い平和的手段による外交努力が必要だったのではないか、という疑問をもったものと思われます〉と漱石の意図を解釈している。
- (2) 岩崎紀美子『與謝野晶子とトルストイ』（2012年、文芸社）。
- (3) 牧村健一郎『新聞記者 夏目漱石』（2005年、平凡社新書）は、従軍記者としての半井桃水の活躍について言及している。
- (4) 山本武利『新聞と民衆』（1973年、紀伊国屋書店）によれば、日露戦争中の新聞発行部数の〈第一位は十二～十三万部の『報知』で、第二位は十～十一万部の『万朝報』〉、〈三位以下は『東京朝日』、『国民』、『時事』、『都』など〉であったという。
- (5) 平岡敏夫『日露戦後文学の研究』（1985、有精堂）は『肉弾』の特徴を、頭から顔へかけグチャグチャに砕かれ、といった「肉体破碎に端的に示されている生々しいイメージであろう」と述べている。それは『趣味の遺伝』の冒頭を想起させる。
- (6) 満州野戦軍の会戦もすべて薄氷を踏むような勝利ではあったが、砲台の取れない旅順攻囲軍と違い、敵を明らかに退却させているので「連戦連勝」と称することができた。
- (7) 倉口徳光〈「戦死者報道」としての『趣味の遺伝』〉（『藝文研究』、2009年6月）に、『趣味の遺伝』の凱旋式に関する考察がある。
- (8) 当時の部隊編成は、1師団＝2旅団＝4歩兵連隊（聯隊）が基本である。
- (9) 12月7日に満州軍総司令部が凱旋しているが、総司令官の大山巖は「元帥」と呼称されていて「將軍」の候補にはならない。
- (10) 当時の戦争雑誌は『日露戦争実記』をはじめ要塞攻略法としての「正攻法」について図解入りで説明しているものが多い。
- (11) 「春や昔～『坂の上の雲』ファンサイト～」<http://www.sakanouenokumo.com/>の「旅順攻略戦③」より。2016年11月24日閲覧
- (12) もちろんまだラジオの実況中継はないが、漱石は『文学論』の中で実況的な描写についてウォルター・スコットの小説を例に解説している。
- (13) 当時の映画（活動写真）は未発達で詳細な実写記録などはなかったが、『日露大戦幻燈映画説明書』（明治38年5月、第十回上）という小冊子が出ており、スライド上映のような形で実況的に説明していた例はあったらしい。ただし、講談調である。
- (14) 『少年日露戦史』（明治38年5月、第11編）。
- (15) 『名将回顧日露大戦秘史・陸戦篇』（1935、朝日新聞社）。引用は、平塚枉緒『写真が記録した日露戦争 旅順攻囲戦』（2009年、学研M文庫）より。

“Shumi-no-Iden”:

Soseki Natsume's Description of the Siege Warfare of Lushun

Toshiki Hashikawa

This essay is about “Shumi no Iden” (The Heredity of Taste), a short story written by Soseki Natsume. This Story was published in Teikoku Bungaku in January 1906. It is a story about a first lieutenant of the infantry who was killed in the war.

The story starts with the phrase “This mad weather would make the gods insane.” The lead character, who relates the tale, presents wars as activities waged by insane gods and designed to give satisfaction to starving dogs, and imagines a scene in which starving dogs bite Japanese and Russian soldiers' flesh and crunch their bones in the battlefield. At one point in the story, he finds himself arriving at his destination, Shinbashi Station, where a crowd of people are waiting for the arrival of a triumphant general from the Manchurian battlefield and his army. The tanned face of the general who has just returned from battle, and the sight of an aged mother throwing herself at her son – a returned sergeant – brings the leading character back to a memory of his friend, who had been on campaign as a first lieutenant of the infantry and had died on November 26 in 1904, during the all-out siege of Lushun Fortress. The leading character goes into the images of the scene of his final battle and death in detail.

As noted above, the friend's last battle scene is described by Soseki (in the person of the narrator) in great detail. The first lieutenant, who was called “Koh-san” belonged to The Third Army First Division of the Japanese Army and was present at the charge up ‘Songshu Shan’ (Pine Tree Hill) – one of the forts behind Port Lushun. However, after jumping into a trench just in front of the enemy fort, he did not emerge. He lay dead in the bottom of the trench, shot with a machine gun.

This essay first describes the image of ‘war’ which is described in the opening sentences of the story, then it turns to the reason Soseki chose to describe the kind of welcome scene that greeted the victorious armies, in November and December 1905.

In addition, it is noted that the ‘Songshu Shan’ assault operated by the First Division in the third all-out siege of Lushun, which is described in this story, was seldom mentioned in histories or stories of the Russo-Japanese War. The reason for the lack of attention was the spectacular, honorable deaths of the members of the ‘Shiro-dasuki Tai’ (the troop that wears white sashes) and the occupation of the *203-Metre Heights* after long and desperate fights.

Finally, the reason why Soseki intentionally described the losing battle of the Songshu Shan Assault.